



Title	話題による日本語学習者の修復行動の変異
Author(s)	大平, 未央子
Citation	大阪大学言語文化学. 1998, 7, p. 43-58
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78065">https://hdl.handle.net/11094/78065</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 話題による日本語学習者の修復行動の変異\*

大平 未央子\*\*

This study investigates non-native speakers' repair of incomplete understanding within topics of specialization. Native speaker (NS) — non-native speaker (NNS) interaction frequently leads to mistakes and/or "incomplete understanding" and it is important that we learn how much, and by what mechanism NNSs repair these problems.

Some researchers regard a topic of conversation as an important factor of the variation of NNS's performance. Whyte (1995) argues that a discourse domain means individual, specialized contexts of production, which is characterized by extensive knowledge (cognitive dimension), important knowledge (affective dimension), and current knowledge (interactive dimension). Using this framework, the study tests the prediction that NNSs will repair incomplete understanding more actively and directly within domain topics.

Data were elicited from 10 NNSs of Japanese (5 beginners and 5 advanced learners) at universities in Japan : each NNS was paired with a NS and their conversation was tape-recorded and transcribed. Discourse domain talk by these subjects is compared with the performance of the same subjects on a non-domain topic. Analysis focuses on three aspects of repair : self-repair, indication of problems, and ways in which problems are indicated.

Results mostly suggest that repair is facilitated by NNSs' ex-

---

\*Effects of conversational topic on Japanese learners' repair (OHIRA Mioko)

\*\*言語文化研究科博士後期課程

pertise and investment in the topic of conversation and this tendency is especially remarkable among beginners. Subjects used more active and/or direct ways for indicating problems and, in some cases, produced more self-repairs when discussing their domain topics. As for indicating problematic communication, the relationship between participants should also be taken into consideration.

This study shows some aspects of the effects of conversational topic on the JSL (Japanese as Second Language) learners' repair. NNS will gain much "comprehensible input" and be pushed to produce much "comprehensible output" through the process of repair. Therefore, NNSs will be able to improve their proficiency by talking about their discourse domain. Taking an account of interactional aspect of repair, however, NNSs may fail to consider their partners' face.

## 1 はじめに

人間同士の意思の疎通は、常にうまくいくとは限らない。相手の言うことがよくわからなかったり、逆に自分の言いたいことが相手にうまく伝わらなかったり、といった状況をしばしば経験することがある。もちろんそこで話をあきらめることも可能ではあるが、話を続ける意思がある場合には、相互の食い違いを修復 (repair) する必要がある。特に二者間の会話において、一方が非母語話者である場合には、コミュニケーションを円滑に運ぶ積極的な手段 (伊藤 1991) としての修復の問題がより重要となると考えられる。

現在までの修復の研究は、そのほとんどが教室あるいは日常の会話における修復を記述するという方法を用いて多くの知見を示している (Schegloff et al. 1977, Kasper 1985)。しかし修復が会話で行われることを考えると、会話のコンテクストによるバリエーションも検討に値するといえよう。例えば、話題に対する関心や知識によって、非母語話者の行う修復は変化するのではないだろうか。

本稿では、日本語の非母語話者 (以下 NNS) と母語話者 (以下 NS) 間の会話にみられる修復を分析し、会話の話題が NNS の修復行動に与える影響について考察を試みる。

## 2 本研究の視座

### 2.1 修復

#### 2.1.1 修復の定義

まず、修復はどんな問題が生じた時に行われるかを明らかにすることで、本稿で論じる修復とはどのようなものかを考えてみたい。

第一に考えられる問題は、会話において何らかの言い間違いが起こった場合である。(1)では、NNSはいったん「たべました (3NNS)」と言った後で、前の自分の発話「毎日 (1NNS)」にあわせて「たべます (3NNS)」に訂正している。

- (1) 1NNS 毎日、いちぶんバナナ、  
 2NS あー、はい。  
 3NNS たべました、たべます?  
 4NS あー。

(1)はいわば話し手側の発話に問題があった場合だが、聞き手側の理解に問題のあった例が次の(2)である。NNSはNSの発話「キャベツ」を繰り返しているが(2NNS)、音声的に不適切な上に途中でおわっているために、理解が不完全であったことがわかる。そのためNSは「キャベツ」の上位語である「野菜」によって発話を一般化し(3NS)、問題を修復している。

- (2) 1NS まー日本で日本であれば、そのレタスとか、キャベツとか、  
 っていうのを食べますよね。  
 2NNS カベ。  
 3NS なんか野菜と、野菜を。  
 4NNS 野菜、はい。

また(3)のように、言い間違いや不完全な理解から問題が生じることを予測して修復がおこる場合もある。NNSは「よってる」が正確な表現かどうか確信がもてなかったので、上昇イントネーションを用いてNSに正否を確認している(1NNS、「?」は上昇イントネーションを示す)。NNSの意図をくみ取ったNS

は正確な表現「わかす／お湯にする」を紹介し（2NS）修復を完成させている。

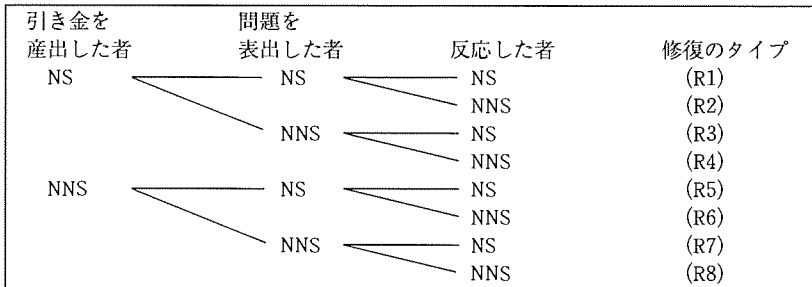
- (3) 1NNS 中国人は全部よってる？  
 2NS あのわかす？お湯にする。  
 3NNS うん、わかす。

このように、本稿で考察の対象とする修復は、何らかの言い間違いが生じた場合の他、会話参加者の理解が不完全であった場合、あるいは不完全な理解のためにコミュニケーションが円滑に進まない可能性がある場合に、訂正や聞き返し、言い替えといった方法によってそれらの問題を解決しようとする試みをさす。研究者によっては問題に敢えて触れずにすませることも修復と捉える場合があるが（Long 1983）、本稿では何らかの「解決しようとする試み」が観察された場合のみを考察の対象とする。

### 2.1.2 修復のタイプ

修復は、引き金となる発話の産出（trigger）—問題の表出（indicator）—反応（response）という三つの段階を経る<sup>1)</sup>。Kasper (1985) の教室での修復の分類にならって、各段階をどちらの参加者が行うかによって修復のタイプを8つに分類する（図1）。

<図1：修復のタイプ>



<sup>1)</sup> 引き金・表出・反応に続いて、反応への応対（react to response）と呼ばれる段階を伴うこともある。

上記の例でいうと、(1)は R8、(2)は R3、(3)は R7 に分類できる。(3)は INNS の「中国人は全部よってる？」という発話が、引き金であると同時に上昇イントネーションによって問題を表出している。

### 2.1.3 問題表出の方法

また問題表出は、引き金となった発話が NNS 自身のもの (R7) であるか、NS の発話 (R3、R4) かによって二分できる。後者の修復において、NNS が問題表出にどのような方法を用いるかを、Varonis and Gass (1985) にしたがって以下の7つに分類する。上記の例でいうと、(2)が NS の発話が引き金となった修復であり、引き金となった語句の繰り返し (IN2) によって問題が表出されている。

#### <問題表出の方法>

- IN1. 不完全な理解の明示的な表明 (例：「日本語わかりません。」)
- IN2. 引き金となった語句の繰り返し (例：NS 「簡単ですか？」  
NNS 「簡単？」)
- IN3. 引き金となった語句の言い替え・完成 (例：NS 「簡単？」  
NNS 「easy？」)
- IN4. 言語的反応なし (沈黙)
- IN5. 驚きの反応 (例：「えーほんとに？<sup>2)</sup>」)
- IN6. 不適切な反応 (例：NS 「あと、どうですか、日本の天気、天気とか対応できますか。」 [引き金]  
NNS 「とても蒸し暑いですね。」  
NS 「今の時期は。」  
NNS 「うん、ド、ドイツでは、あー、天気が蒸し暑くないです。」 [表出]  
NS 「あー、だからその、天気の変化が激しいじゃないですか、日本では。」 [反応])
- IN7. 明らかな訂正 (例：「えー、それ悪い、違う。」)

<sup>2)</sup> 「えーほんとに？」といった表現は単なるあいづちとして用いられることもあるので、文脈から理解の不完全さが確認されるもののみを取り上げた。

## 2.2 会話の話題

### 2.2.1 談話領域の定義

会話の話題は、会話の参加者を社会的、心理的に位置付けるという意味で重要だと言われており (Zuengler 1993a)、話題と変異の関係が談話領域モデル (discourse domain model) という枠組みを用いて検討されている。Whyte (1995) は、より広く洗練された知識を持ち (認知的側面)、より中心的かつ投資の価値がある関心事で (情意的側面)、当該分野の知識をよく活性化する (相互行為的側面) 話題が、その人にとっての談話領域であると述べている。本稿もこの定義に従い、談話領域は三つの構成要素からなると考える。

なお談話領域と話題の関係について、Zuengler (1993a) は、話題 (topic) は談話領域を実現させる要素 (a performance element) で、人は談話領域について話すのではなく、談話領域と関係した「あること (things; topic)」について話すのだ、としている。本稿では以上の指摘を踏まえ、談話領域は各人の頭の中にある認知構造を抽象的にあらわすのに対し、話題は、ある会話で話される具体的な内容を示す。

### 2.2.2 談話領域が修復に与える影響—仮説の設定

談話領域に関わる話題 (以下、領域トピック) は、その人にとって知識や関心が豊富で、重要な話題なのであるから、会話に対する姿勢がより積極的になると考えられる。このことは、NNSが行う修復にどのような影響をもたらすだろうか。

まず修復のタイプについて考えられるのは、自分の発話に対するモニターが正確にできるようになるために、NNSの自己完結型の修復 (R8) が増加するのではないかということである。また相手の発話が理解できなかつたり、自分の発話の正否に確信がもてない場合、その問題を解決しようとする意欲が高まってより多く問題を表出することが予想できる。

ここでもう一度、2.1.3で分類した問題表出の方法を思い出してみたい。IN1の「不完全な理解の明示的な表明」というのは、例の「日本語わかりません」のように、相手の発話に対する理解が不十分であることを明白に表明するものである。領域トピックでは、問題の解決が重視される結果、問題を婉曲的に暗示するよりも、問題の存在を明らかに宣言するような方法が多用されるのではないだろ

うか。一方、相手の発話の訂正は、Schegloff et al. (1977) でも指摘される通り、一般にはこれを避け、代わりに婉曲的な言い回しで相手の自己訂正を促したり、訂正自体をしないうですませる場合が多い。しかし知識や関心の高い話題では、先程と同じ理由で「えー、違う」などとあからさまな形で訂正を行う場合 (IN7) がみられるのではない。

以上をまとめると、次の3つの仮説を設定したことになる。

仮説1 NNSにとってより知識があり、重要で、当該分野の知識をよく活性化  
する話題 (領域トピック) では、そうでない話題 (非領域トピック) に比  
べ、NNSの自己完結型の修復 (R8) が多くなる。

仮説2 領域トピックでは、非領域トピックに比べ、NNSは多く問題表出 (R3、  
R4、R7) を行う。

仮説3 領域トピックでは、非領域トピックに比べ、NNSの、相手の発話に対  
する問題表出により明示的、直接的な方法 (IN1、IN7) が用いられる。

### 3 調査

#### 3.1 データ

大阪およびその近郊の大学に在籍する日本語のNNS 35名に、NSと一対一で「健康」「コンピュータ」について自由に会話をしてもらった。話題以外の要因の影響を極力少なくするために、会話を行うペアは同性、同年代、初対面に限定した。調査場所は各被調査者が在籍する大学の教室、談話室であった。調査者 (筆者) はペアの引き合わせおよび調査の簡単な説明をした後に退席し、二人で各話題について10分間ずつ自由に話してもらい、すべてを録音した。録音した会話をできるだけ忠実に文字化し、データとした。会話データの収集は1996年6月から7月にかけて実施した。

#### 3.2 談話領域値の判定と分析

合計20分の会話が終了した直後にアンケート (資料参照) を行い、各話題に対する被調査者の談話領域値 (談話領域の3つの構成要素をどれだけ満たすか) を判定した。アンケートは各話題について9問で構成されており、9問それぞれ

の答えに応じて得点を与え、その得点を談話領域値とみなす。最高は+6、最低は-6で、NNSの談話領域値が相対的に高い話題を領域トピック、低い話題を非領域トピックとする。なお、談話領域は相対的な概念であり (Zuengler 1993b)、領域トピックと非領域トピックを分けるのは各NNSごとの話題間の相対的な差であると考えたため、領域トピックの談話領域値でも、マイナスを示す場合もある。

本稿では、35名の中から談話領域値の差が大きかったNNS 10名 (NNSの言語能力が初級の者、上級の者各5名) を選んで分析した (表1)。NNSの国籍の内訳はドイツ3名、中国・オーストラリア各2名、インドネシア・米国・台湾各1名であった。平均年齢は26.75歳 (最高31歳、最低20歳、記入なし2名)、性別は男性6名、女性4名であった。NNSを言語能力で2グループに分けたのは、修復という言語行動の性格上、言語能力によって結果に差が出るのではないかと考えたためである。なお、初級の学習者は日本語の初級教科書の学習をほぼ終了した程度、上級の学習者は日本語 (JSL) のクラスに参加することなく日本人学生と同じように大学の講義に出席している程度の言語能力である。

分析の際には、データから修復のおこっている箇所をピックアップし、修復のタイプおよび問題表出の方法について、出現頻度を話題間で比較した。

<表1：被調査者の属性と談話領域値>

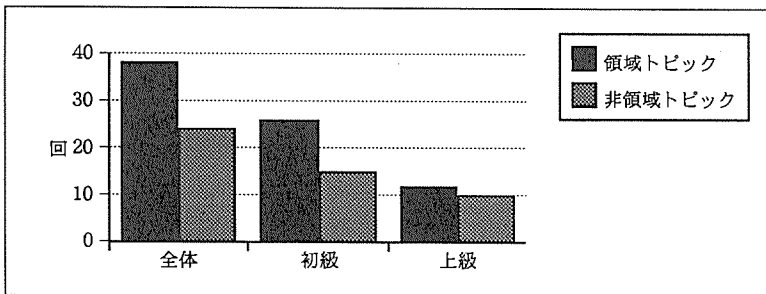
被調査者	国籍	年齢	性別	日本語能力	談話領域値の差	領域トピック	非領域トピック
DN	ドイツ	31	M	初級	3.33	3.33	0.00
JM	中国	—	F	初級	5.33	0.33	-5.00
SY	ドイツ	26	M	初級	2.33	0.00	-2.33
UO	ドイツ	27	F	初級	2.33	-0.67	-3.00
DG	中国	26	M	初級	2.33	-1.00	-3.33
AM	インドネシア	—	F	上級	3.67	1.67	-2.00
TK	アメリカ	30	M	上級	4.33	2.00	-2.33
CH	台湾	28	M	上級	4.33	2.66	-1.67
RS	オーストラリア	20	F	上級	8.00	2.33	-5.67
MM	オーストラリア	26	M	上級	2.66	4.33	1.67

## 4 分析結果

### 4.1 仮説1・自己完結型の修復

全データ中で自己完結型の修復（R8）は合計63回観察されたが、そのうち領域トピックで起こったものは38回（全体の60.3%）、非領域トピックでは25回（同39.7%）であった。また、言語能力別にみると初級グループは領域トピック26回、非領域トピック15回と11回の差があり、t検定（両側検定<sup>3)</sup>の結果有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）のに対し、上級のNNSではその差は2回（領域トピック12回、非領域トピック10回）にとどまり、有意差も認められなかった（図2）。個人別にみると、領域トピックでR8が増加したのは初級4名（DN・JM・UO・DG）と上級2名（CH・MM）の計6名であった。残る4名のうち、1名（SY、初級）はトピック間の変化がなく、2名（TK・RS、いずれも上級）は領域トピックで減少した。また1名（AM、上級）はR8を全く行わなかった（表2、表3）。

<図2：全体および言語レベル別にみた自己完結型修復の変化>



<sup>3)</sup> 統計処理には「エクセル統計 (Ver.1.1)」を用いた。

〈表 2・各被調査者の自己完結型修復の変化〉

	初級 (人)	上級 (人)	計 (人)
領域トピック>非領域トピック	4	2	6
領域トピック=非領域トピック	1	0	1
領域トピック<非領域トピック	0	2	2
自己完結型修復なし	0	1	1

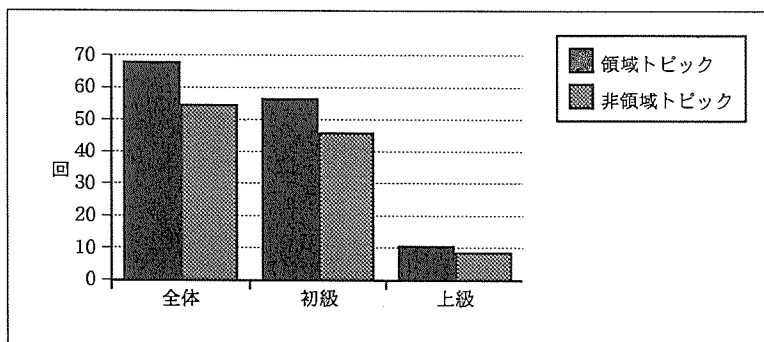
〈表 3・各被調査者の自己完結型修復の頻度〉

	初級					上級					合計
	DN	JM	SY	UO	DG	AM	TK	CH	RS	MM	
領域トピック	5	6	3	7	5	0	5	3	1	3	38
非領域トピック	4	3	3	4	1	0	6	0	2	2	25
合計	9	9	6	11	6	0	11	3	3	5	63

#### 4.2 仮説 2・問題表出

観察された問題表出は全部で 123 回、その内領域トピックで起こったものは 68 回 (全体の 55.3%)、非領域トピックは 55 回 (同 44.7%) であった。言語能力別では初級グループが 57 回対 46 回、上級グループが 11 回対 9 回であったが、いずれも統計上の有意差は確認されなかった (図 3)。また NS の発話に対する

〈図 3：全体および言語レベル別にみた問題表出の変化〉



表出 (R3、R4) と NNS 自身の発話に対する表出 (R7) を別々にまとめてみると、前者は領域トピック 51 回、非領域トピック 39 回と 12 回の差があったが、後者は 17 回対 16 回とほとんど変化しなかった (表 4)。また個人別では、領域トピックで問題表出が増加したのは初級 4 名 (JM・SY・UO・DG) と上級 1 名 (MM) の計 5 名であった。残る 5 名のうち、2 名 (AM・CH、いずれも上級) はトピック間の変化がなく、初級・上級各 1 名 (DN・RS) は領域トピックで減少がみられた。また 1 名 (TK、上級) は問題表出を全く行わなかった (表 5、表 6)。

<表 4：引き金となった発話別にみた問題表出の変化>

	領域トピック (初級/上級)	非領域トピック (初級/上級)	計
NS の発話が引き金となった問題表出 (R3+ R4)	51 (43/8)	39 (32/7)	90
NNS の発話が引き金となった問題表出 (R7)	17 (14/3)	16 (14/2)	33
計	68 (57/11)	55 (46/9)	123

<表 5：各被調査者の問題表出の変化>

	初級 (人)	上級 (人)	計 (人)
領域トピック > 非領域トピック	4	1	5
領域トピック = 非領域トピック	0	2	2
領域トピック < 非領域トピック	1	1	2
問題表出なし	0	1	1

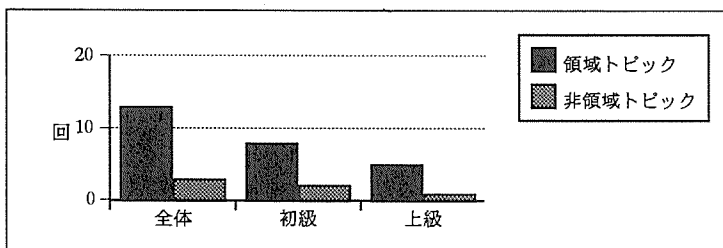
<表 6：各被調査者の問題表出の頻度>

	初級					上級					計
	DN	JM	SY	UO	DG	AM	TK	CH	RS	MM	
領域トピック											
R3+ R4	15	3	11	4	10	1	0	2	0	5	51
R7	7	2	3	2	0	1	0	0	1	1	17
小計	22	5	14	6	10	2	0	2	1	6	68
非領域トピック											
R3+ R4	17	4	4	1	6	2	0	2	2	1	39
R7	9	0	4	0	1	0	0	0	0	2	16
小計	26	4	8	1	7	2	0	2	2	3	55
合計	48	9	22	7	17	4	0	4	3	9	123

## 4.3 仮説3・問題表出の方法

NSの発話について問題表出を行う際に用いられた方法のうち、不理解の明示(IN1)は合計16回観察されたが、そのうち領域トピックで起こったものは13回、非領域トピックでは3回であった。また、言語能力別にみると初級グループは領域トピック8回、非領域トピック2回の計10回を数え、上級グループでは、5回対1回の計6回であった(図4)。個人別では、領域トピックでIN1が増加したのは初級5名全員と上級3名(AM・CH・MM)の計8名であった。残る2名のうち、1名(RS、上級)は領域トピックで減少を示し、1名(TK、上級)はIN1を全く行わなかった(表7、表8)。

<図4：全体および言語レベル別にみた不理解の明示の変化>



<表7：各被調査者の不理解の明示の変化>

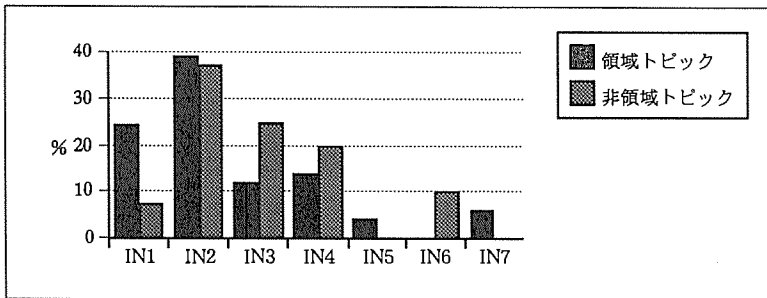
	初級 (人)	上級 (人)	計 (人)
領域トピック > 非領域トピック	5	3	8
領域トピック = 非領域トピック	0	0	0
領域トピック < 非領域トピック	0	1	1
「不理解の明示」なし	0	1	1

<表8：各被調査者の不理解の明示の頻度>

	初級					上級					合計
	DN	JM	SY	UO	DG	AM	TK	CH	RS	MM	
領域トピック	1	3	1	1	2	1	0	1	0	3	13
非領域トピック	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	3
合計	1	4	1	1	3	1	0	1	1	3	16

しかしこれらの頻度は少なすぎて統計処理が不可能なため、全体の中で不完全な理解の明示という方法が用いられた割合を調べてみた。NNSがNSの発話に問題を表出した場面は領域トピックで51回観察されたが、その内不完全な明示という方法が用いられたのは13回(25.5%)であった。一方、非領域トピックでは39回中3回(7.7%)にとどまった(図5)。この比率の差について $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差が認められた( $p < 0.05$ )。

<図5：問題表出方法の割合>



そして相手の発話の明示的な訂正 (IN7) という方法は、非領域トピックではどの被調査者でも全く見られなかったのに対し、SYの領域トピックにおいてのみ3例(5.9%)が観察された。以下に一例を示す。

- (4) 1NS 俺もワープロだけは//使えるんだけどさ。  
 2NNS うん、  
 3NNS あーそう。  
 4NS でも手で書くより早いよね。  
 5NNS えー、違う。  
 6NS //ワープロの方が、  
 7NNS ワープロの方が早いです。  
 8NS 早いよね。  
 9NNS うん。

NSの「でも手で書くより早いよね」という発話(4NS)に対して、SYは「えー、

違う (5NNS)」と反対のシグナルを送っている。さらに続く 7NNS では、NS の発話をさえぎる形で (//は発話の重なりを示す) 訂正を行っている。4NS は「手で書くよりワープロで書く方が早い」という比較文の「ワープロで書く方が」という部分を省略した表現であり、NNS の訂正 (7NNS) は結局同じことをいっていることになる。おそらく SY は「手で書くより早い」を「手で書く方が早い」と混同したのであろう。5NNS の「えー、違う」は、非常に直接的で、SY の強く否定する気持ちが現れているといえる。

## 5 考察とまとめ

自己訂正の分析結果から、初級の NNS は、領域トピックにおいて、自らの発話に対するモニターをより活発に行っているといえる。これは Eisenstein and Starbuck (1989) の結果とは異なるものであるが、彼女らの研究は動詞の形式のみを分析の対象としていたのに対し、本稿では内容的な訂正を含めたための違いだと考えられる。また上級 NNS は、日本語能力が一定のレベルに達しており、修復自体の起こる頻度が少ないために、話題間で目立った差が表れなかったであろう。

次に問題表出の頻度では、領域トピックにおいてより積極的に相手の発話を理解しようとする姿勢がみられる一方で、NNS 自らの発話に対する表出 (自分の発話の正否の確認) の頻度はほとんど変化しなかった。これは、NS に頼らず自立的に談話を組み立てていこうという姿勢の表れではないだろうか。ただし表出の頻度については有意差が確認できなかったため、領域トピックにおける減少幅が最も大きかった被調査者 (DN、初級) の例を検討してみると、NS の会話への積極性の減少に伴って NNS の積極性も減少するケースがみられた<sup>4)</sup>。修復は相互行為的な側面を多分にもっており (永山 1996)、本稿ではあまり立ち入ることができなかったが、会話の相手である NS の話題に対する意識、および、両者の知識差によって生じる役割関係も考慮しなければならない。

そして問題表出の方法については、領域トピックでは、より多くの正確な情報を求めるため、自分の理解不足をはっきりと伝えようとすると考えられる。言語的反応なし (IN4)、あるいは不適切な反応 (IN6) といった、NNS が意識して選

---

<sup>4)</sup> 詳細については大平 (1997) 参照。

択したのではない消極的な方法の使用が領域トピックで減少したことも、反対側からこれを裏付けているといえよう。

このように NNS の積極性が増し、修復を行う機会が増えるということは、理解可能なインプット (comprehensive input) に触れたり、理解可能なアウトプット (comprehensive output) を産出したりする機会を増やすことにつながるであろう。したがって、領域トピックについて話す機会を多く持つことによって、NNS は言語能力をより向上させることができると予想される。実際の教育現場でも、お仕着せのタスクや会話練習ではなく、NNS が興味をもち、それについて話すことが重要だと感じられるようなトピックの選択が望まれる。

しかし修復の相互行為的側面を考えると、談話領域に関わる話題では話に夢中になるあまり、相手への配慮を怠ってしまうおそれもある。特に今回のデータのような初対面の人との会話では、相手の発話の明示的な訂正は、非常に失礼だと受け取られてしまう危険性が高い。NNS にとって、限られた言語能力で円滑なコミュニケーションを行うというのは至難の業ではあるが、修復のプロセスや方法についての指導を行うことによって、問題を修復するための行動がさらに問題をうんでしまうような状況は回避できるのではないだろうか。また母語話者である日本人の側も、NNS の「失礼な」発話がなぜ生じるのかについて理解を深めることが必要だといえよう。

## 引用文献

- Eisenstein, M. and R. Starbuck. 1989. "The effect of emotional investment on L2 production." in Gass, S., C. Madden, D. Preston, and L. Selinker (eds.). *Variation in Second Language Acquisition (Vol.2): Psycholinguistic Issues*. Clevedon and Philadelphia: Multilingual Matters. 125-137.
- Kasper, G. 1985. "Repair in foreign language teaching." *Studies in Second Language Acquisition*, 7. 200-15.
- Long, M. 1983. "Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensive input." *Applied Linguistics*, 4. 126-41.
- Schegloff, E. A., G. Jefferson, and H. Sacks. 1977. "The preference for self-correction in the organization of repair." *Language*, 53.2. 361-382.
- Varonis, E. and S. Gass. 1985. "Non-native/non-native conversations: a model for

negotiation of meaning." *Applied Linguistics*, 6, 71-90.

Whyte, S. 1995. "Specialist knowledge and interlanguage development: a discourse domain approach to text construction." *Studies in Second Language Acquisition* 17, 153-83.

Zuengler, J. 1993a. "Explaining NNS interactional behaviour: the effect of conversational topic." in Kasper, G. and S. Blum-Kalka (eds.) *Interlanguage Pragmatics*. Oxford: Oxford Univ. Press. 184-95.

Zuengler, J. 1993b. "Encouraging learners' conversational participation; the effect of content knowledge." *Language Learning* 43: 3, 403-32.

伊藤博子 1991「対談番組における“Repair”」『日本語学』6月号 明治書院 62-74

大平未央子 1997『日本語母語話者と非母語話者のインターアクション—談話領域と中間言語の変異に関する一考察』大阪大学大学院言語文化研究科修士学位論文

永山友子 1996「日本語教科書の会話例と日本語母語話者の実際の会話との比較—音声言語による repair の相互作用の観点から—」『日本語教育』90号 日本語教育学会 1-12

資料：談話領域アンケート（健康についての質問項目）

- 1、多くの人が「健康」について私よりもたくさん話せると思う。
- 2、「健康」について話す機会がよくある。
- 3、「健康」について自信をもって話すことができる。
- 4、「健康」について考えるのに多くの時間をかけている。
- 5、「健康」について本を読んだことはない。
- 6、最近、「健康」について話したことはあまりない。
- 7、「健康」について話すときにはあまり自信がない。
- 8、「健康」については、ほかの話題よりも色々話すことがある。
- 9、「健康」について話すときには、自分の意見をわかってもらおうよう、特に努力する。

(Whyte (1995) で用いられたアンケートを参考にして作成した。各質問について「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」という4つの選択肢から最も適当なものを選んでもらった。各質問には英語訳をつけた。「コンピュータ」についても同様。)